

## 朝鮮朝初期雪岑の法界図註釈

韓 鍾 萬

『大華嚴一乘法界図註』は新羅の義湘大師（六二五—七〇二）が著述した『華嚴一乘法界図』を雪岑（一四三五—一四九三）が註解したものである。義湘の法界図は現存する華嚴学中の唯一なる著述であり、彼が入唐修学の際に著述したものである。この法界図を註解した雪岑の立場は、朝鮮初期仏教における一傾向を示していた禅的にとらえたところに特色があるといえるであろう。

雪岑は、法界図註釈の動機を次のように述べている。

「法界図は、一海印図を以て無辺之教を円摂した」と前提し、「義湘がこの図を始製して、三世間十法界の莊嚴無尽之義をあらわしたにも拘わらず、後世の学者たちは、これを重演流布しながら、表面的・教綱的解釈傾向である『記録鈔』を残して本意が喪失された」という。

禅宗は、教宗の教綱的解釈が葛藤のもとになると指摘し、教宗は、禅宗の禅は禅一辺倒になると批判した、また、理は通達しながらも事に礙し、事は通達しながらも理には味する

という。このように禅と教が互に批判し、理と事が分離される本来面目を示したとき、義湘が法界図を製作し、その円融なる表面的・教綱的解釈をして本意を臆解し、支離蔓延になってしまったと批判する。以上の如く雪岑は、禅教一致と理事円融の立場で法界図の原点を把握しているといえよう。

更に、「円融無二之法」を「固体守一之物」に変質させた  
と批判することは、彼の華嚴觀は、禅と円融無二に融合しながら理と事を一元的にとらえたものであるといえよう。

雪岑は、華嚴思想の核心を、法性という意味により簡明にみている。義湘が二百十字で、『一乘法界図』をもって法界を莊嚴したことを例証しながら、繁多なる教綱的解釈を批判している。玄・妙・心・性と説明するが、義湘の「未吐一字前消息」はなんであるうかと自問しながら、自分自身がその消息を教しえてやろうと、自信に満ちた表現をする。

以上のように、雪岑の華嚴思想の体系はより簡明なる表現

を通じて、核心的なる意味を禪的にとられたと思われる。

さらに、頓と漸、円と別の関係は仏教思想史において、多くの問題点をなげかける問題である。雪岑はこのような問題を、頓中漸、漸中頓、円中別、別中円、大用現前、殺活自由等、簡明にあかしている。<sup>③</sup>

前述した通り雪岑は、禪と教は一致であるとみるのみでなく、禪と教は相扶助的な立場であるというている。すなわち、「言者心之発也、心者言之宗也」とみている。円融の法は、本来、名相はないけれど、言句を借りれば経論になり、経論がなければ円融なる法を闡明できないので、経論というものは円融法性の同規でありながら、三世諸仏の大意になるという。<sup>④</sup>しかし、彼は、経論の繁多なる教綱的解釈を重視しない。故に、『法界図』の各句節の末尾には禪的表现でもって帰結をなしている。

以上、雪岑の『法界図』の動機と華嚴思想の核心を、『法界図』序を中心にして推察してみた。次に、彼の『法界図』各句節の解釈にあらわれた華嚴思想の核心をさぐることにしてみる。

『法界図』各句節について、彼の、現象的、真俗不二という意味における註釈の要点と、各句節の華嚴思想の内容を、繁多なる教綱的解釈でない禪的論理を考察してみよう。

『法性円融無二相』の意味を把握するにあたり、彼は、

朝鮮朝初期雪岑の法界図註釈（韓）

「青山緑水、即是本来性」であると端的に規定している。<sup>⑤</sup>これは現実肯定の諸法実相の意味をより簡明にあかしたものである。さらに、法を、「六根門頭 森羅万像」性を、「六根門頭 常常受用」というのは、現実肯定の強点である。

「諸法不動本来寂」の意味規定においても、不動とか本来寂を、本来性的であるという痕跡なしに、本来性と現実性が一致した、「不動絲毫合本然」の境地とみている。

「無明無相絶一切」は一面、言語道断し心行処が滅した現実超越の境地と考えられるが、雪岑があかした、「非縁起、非証分」という意味からみると、現実性そのままを、如何とも規定することのできない、実相とみている。<sup>⑥</sup>

「証智所知非余境」においても、証智と所知との関係を、証智境と世間境が同じであるか、異なるのであるかと自問しながら禪的な表現でもって一元化の意味をなしている。

「真性甚深極微妙」において、法性と真性の一元的観点を雪岑は、禪的に表現している、藏人（小乗）は豎看して真と妄を区別するに対して、円頓機中においては、横看して真妄無別にみるが、真妄無別という執着すらも、一段階、およびぬと指摘し、不豎不横を強調する。<sup>⑦</sup>

『不守自性随缘成』において、本来華嚴学においては、本来の自性と現実的なる随缘を一切法無自性と、理事無碍の原理でもって、一体とみるものであるが、雪岑は、さらに、一

切法無性と一切性無住の原理でもって、無住であるすなわち、無体であり、無体であれば隨縁不碍といつて実体觀念を徹底的に排撃し、隨縁不碍であるが故に、不守自性でもって十方三世が、そのまま成しているという<sup>①</sup>、ここでは如何なる固定した実体觀念も徹底的に超越している。実体觀念を乗り越えて現象が実相にみえるということを強調している。

「一中一切多中一」と「一即一切多即一」において均如は、一中一切多中一を因果道理門の理であると、一即一切多即一を徳用自在門の用であると規定している。雪岑は、不守自性の無自性の原理と直結させ一中一切多中一を一中一切多不碍於一に意味づけ、一即一切多即一を縁生無住、因果同時に意味づけている。以上のように、雪岑は、中門と即門を内容面から一致させたのである。

「理事冥然無分別」を雪岑は、不守自性隨縁成の原理を適用して、縁起時、的的無性し、無性処、常常縁起することを強調している。

「是故行者還本際」は、本際を知るかな、禪を問われたら、禪が妄になり、真理をもとめたら、真理すらも親しむべからず、正しく悟ったといえども、眼裡塵であると指摘し、別に本際を真とみとめ、現実を妄とみとめ、妄を捨て、真をもとめることは修行方法的意味である。と雪岑は、このように徹頭徹尾、真、妄を一元的にみて、その一元という痕跡す

らものりこえるようにする。

「叵息妄想必不得」は、均如は匪磨而円明等覚義と対治修証之義に二分して対治修証主義の立場を取っているが、雪岑は、三世諸仏が屍体を守る鬼神であり、歴代の禪師がおろかな凡夫である、仏と菩薩が説き、三世一時説といえども、湯水のわく音に過ぎぬ<sup>②</sup>、喝破し、妄想を息むということは、現実的妄の立場から、本来的なる真をもとめる一つの方法である。さらに、真をもとめ真にいたれば、既に真・妄の痕跡はなくなってしまう。真ということまですら、放下したところに、正に真の姿が現われるであろう。現実の妄を、真・妄二元にみるのではなく、一元的に、一境地に達観したのである。これがすなわち、華嚴思想の特色であろう。このような意味からして、雪岑は義湘の真髓をよく了解したといえるであろう。

以上の如く雪岑の『法界図註』にあらわれた現象から実相を徹見する法性円融の意味をさぐってみた。雪岑の註釈は華嚴思想の核心を、簡明でありながら、しかも、生動する面にあかしたといえるであろう。故に、均如の註釈が学術的であるといえるならば、雪岑の註釈は禪的であるといえるであろう。

1 「梅月堂全集」p. 415.

- 2 「梅月堂全集」 p. 415.  
 3 「梅月堂全集」 p. 415.  
 4 「梅月堂全集」 p. 516.  
 5 「梅月堂全集」 p. 415.  
 6 「梅月堂全集」 p. 416.  
 7 「梅月堂全集」 p. 416.  
 8 「梅月堂全集」 p. 416.  
 9 「梅月堂全集」 p. 417.  
 10 「梅月堂全集」 p. 417.  
 11 「梅月堂全集」 p. 417.  
 12 金知見編著、均如大師華嚴学全書、上、p. 564.  
 13 「梅月堂全集」 p. 418.  
 14 「梅月堂全集」 p. 420.  
 15 金知見編著、均如大師華嚴学全書、上、p. 571.  
 16 「梅月堂全集」 p. 420.

(大韓民国 円光大学校教授・哲博)

掲載されなかった諸氏の発表題目(五)

大賢の教学について 木村宜彰(大谷大) 天台三観説の教観の相違 野本覚成(天台宗典編纂所) 新羅浄土教の一断面 源弘之(龍谷大) 僧肇の縁起論——注維摩詰經の一文をめぐる—— 池田宗讓(大正大総合仏教研究所) 維摩玄疏に於ける一、二の問題 濱田智純(大正大総合仏教研究所) 華天の教学的交渉——性起と性具—— 結城令聞(京都女子大) 迦才「浄土論」における行儀の問題 成瀬隆純(早稲田大学院) 道綽教学における悪と悪人 小倉求(同朋大) 道綽禪師の十念釈 佐藤健(仏教大) 台湾仏教の伝入について 黄美(駒沢大) 達摩鬱多羅と法上 秋田光兆(大正大総合仏教研究所) 大阿弥陀經——その五事の採用をめぐる—— 朝山幸彦(北海道教育大) 十玄門の成立について 石井公成(早稲田大学院) 「一乘十玄門」考 小林實玄(龍谷大) 智儼の阿梨耶識観 織田顕祐(大谷大学院) 十二門論宗致義記にみられる空思想 赤尾栄慶(大谷大学院) 華嚴一乗教義と「妙法蓮華經」について 一色順心(大谷大) 華嚴思想史の諸問題——覚州鳩の華嚴春秋をめぐる—— 鎌田茂雄(東京大) 新羅元暁の浄土観について 申賢淑(東国大) 新羅崔致遠撰「四山碑」考 金知見(大韓傳統仏教研究院)